

第3章 歴史的調査ならびに文化財的評価

第1節 設計主体について

日本庄商業銀行倉庫の設計に関する 現存最古の客観的な資料として、明治33(1900)年12月に、現在の清水建設の前身である「清水店」が製作した作品集「明治三十三年十二月製『清水方建築家屋撮影』」第2巻があげられる。^{*}

同作品集において「本庄商業銀行倉庫新築工事」として、写真・平面図の他に以下の項目が記載されている。この資料の存在により、設計者などの特定に至った。

^{*} 松波秀子. 明治・大正期の建築作品集にみる清水組設計組織 その1. 清水建設研究報告, no.89. 2012.

建築位置	埼玉縣下本庄町
坪数	百坪
建築費	金七千六百五十拾圓
平均壹坪直段	金七拾六圓五拾錢
起工	明治二十九年二月二十六日
落成	同 年八月十日
設計技師	岡本鑒太郎君 清水釘吉君
構造	煉瓦石造り二階建
摘要	腰巻黒焼過煉化石平均石堅石窓入口非常用
鐵扉及裏白戸建入	板張
間内床カ	漆喰ヌリ
同壁	割栗地形コンクリート打
地形	

図3-1. 『清水方建築家屋撮影』表面読み下し

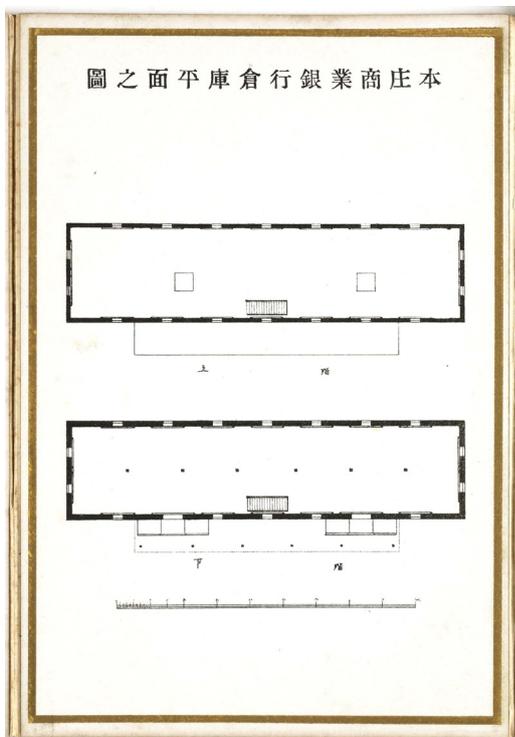


図3-2. 『清水方建築家屋撮影』裏面

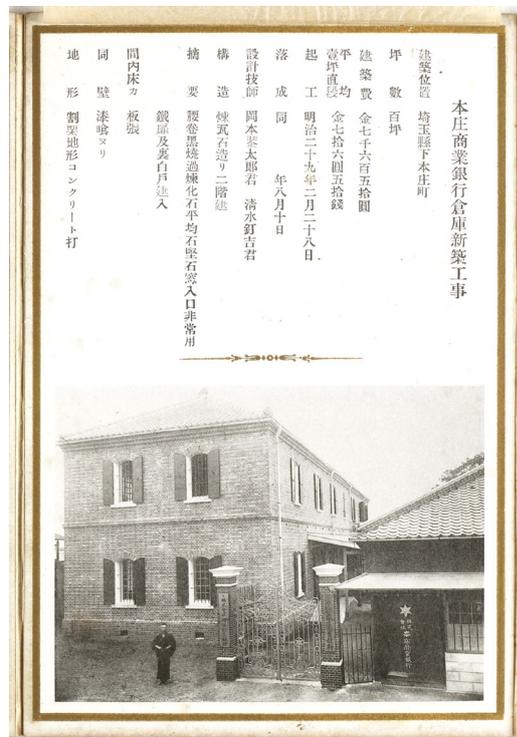


図3-3. 『清水方建築家屋撮影』表面

1. 発注者

— 不明 (想定される人物: 諸井孝次郎 (生没年不明))

本庄商業銀行は、明治27(1894)年12月1日設立、頭取、諸井孝次郎、副頭取、宮下林平、取締役、境野伝七・戸谷八郎左衛門・松本文作。同倉庫は、明治29(1896)年竣工であることから、当時の頭取である諸井孝次郎による発注が考えられる。

諸井孝次郎は、明治維新後に金融業を始めた父、諸井治郎から、明治10(1877)年前後、その地位を譲られた。そのことが本庄商業銀行設立にもつながっていると考えられる。諸井孝次郎は明治20年代、本庄町内の長者番付に名があり、また明治22(1889)年に町村制が施行され本庄宿から本庄町となった際には、町役場が彼の持家に置かれた。このことから、当時の本庄町における有力者であったことがわかる。

2. 施工者・設計者

— 清水店、岡本鑿太郎・清水釘吉

明治10年代頃、政府の方針としては、木造建築は一式請負、煉瓦造の工事は分割請負が原則であり、清水店(現、清水建設株式会社)のような総合請負にとっては不利であった。この状況を打破するため、明治19(1886)年、当時の店主、清水満之助は辰野金吾の推薦で工部大学校造家学科を卒業した工学士である坂本復経を初代技師長として迎えた。技師長は、会社運営を担当する店主が及ばない技術面を一任された。これを機に、清水店の設計組織がつくられ始める。本庄煉瓦倉庫が建設されるまでの技師長には、初代技師長、坂本復経(在任: 明19.7～21.5)、技師長代行、中村達太郎(在

任: 明21～24.1)、二代技師長、渡辺譲(在任: 明24.1～27.2)がいる。

同社の作品集を確認すると、明治20年代において、清水店設計施工による煉瓦倉庫、あるいは煉瓦関連施設が群馬県南部・埼玉県北部に散見される。本庄煉瓦倉庫と関連すると思われる組織ならびに建物として、上毛倉庫株式会社二号三号倉庫(明治29(1896)年)と日本煉瓦製造会社工場(明治22(1889)年)があげられる。

前橋市に現存する上毛倉庫株式会社二号三号倉庫(以下、上毛倉庫)は、本庄煉瓦倉庫と同じ明治29(1896)年竣工の煉瓦倉庫である。また、上毛倉庫も同様に清水店によるもので、設計は本庄煉瓦倉庫の設計者である岡本鑿太郎によるものである。さらに、『上毛倉庫七十年誌』(上毛倉庫、1966.)に

『清水方建築 いへの寫眞 貳帙』	
3. 日本煉瓦製造会社工場	所在地: 埼玉県深谷市 竣工年: 明治22(1889)年 設計技師: 坂本復経
9. 第卅九國立銀行本店倉庫	所在地: 群馬県前橋市 竣工年: 明治22(1889)年 設計技師: 中村達太郎

明治三十三年十二月製『清水方建築家屋撮影』1	
3. 上毛倉庫株式会社倉庫	所在地: 群馬県前橋市 竣工年: 明治29(1896)年 設計技師: 岡本鑿太郎

明治三十三年十二月製『清水方建築家屋撮影』2	
3. 本庄商業銀行倉庫	所在地: 埼玉県本庄市 竣工年: 明治29(1896)年 設計技師: 岡本鑿太郎・清水釘吉

図3-4. 近郊地域における清水店の作品

よると、上毛倉庫設計の際に国立第三十九銀行倉庫(明治22(1889)年竣工)を模範としたとされる。国立第三十九銀行倉庫の設計は、当時技師長代行であった中村達太郎の設計である。

深谷市に現存する日本煉瓦製造会社工場(明治22(1889)年竣工)は、初代技師長・坂本復経の設計である。本煉瓦倉庫の煉瓦は、今回のプロジェクトにより、日本煉瓦製造会社で製造されたものと判明した。

3. 設計者・岡本鑒太郎、清水釘吉について

岡本鑒太郎(おかもと・そうたろう)

慶応3(1867)年-大正7(1918)年

岡本は、清水店四代技師長(在任:明治34(1901)年6月~大正2(1913)年6月)であった。明治23(1890)年に帝国大学工科大学造家学科を卒業し、翌24年清水店に入店、29年に技師となる。明治33(1900)年から34(1901)年まで洋行。明治34年に技師長となる(松波2012)。清水店における二十余年の職務の中で、和洋各種の建築を設計したが、なかでも前半は紡績工場をはじめとする工場建築で腕をふるい、後半では和洋住宅の改良に独自の手腕を示した。また、欧米の新施工技術の導入にも力を入れていた。



図3-5. 岡本鑒太郎



図3-6. 清水釘吉

清水釘吉(しみず・ていきち)

慶応3(1867)年-昭和23(1948)年

清水釘吉は、清水店三代技師長(在任:明治27年2月~同年10月)であった。明治24(1891)年、帝国大学工科大学造家学科を卒業と同時に三代店主満之助の長女タケと結婚し、清水家に入る(松波2012)。明治27(1894)年、三代技師長となるが、同年10月、日清戦争に応召し、帝大において一年先輩であった岡本鑒太郎に引き継ぐ。その後、合資会社清水組改組以降、初代社長となった。

以上のように、同建造物は明治初期における、帝国大学出身の若い設計者による、当時最も本格的であった煉瓦倉庫の設計であると言える。さらにそれは、日本近代建築産業の高い品質を作り上げてきた、一大請負組織により施工された。

それゆえ、同建造物の持つ意匠、構造等いわゆるデザインの特徴は、明治20年代後半にあって、当時の最も先進的な情報を土台として建設されたと考えてよいであろう。

本庄煉瓦倉庫、上毛倉庫ともにこの二人の技師長の移行期に建設されている(明治29年竣工)。本庄倉庫は岡本鑒太郎と清水釘吉の二人によって設計されているのに対し、上毛倉庫は岡本のみ設計によるとされる。この二つの倉庫は、細部の鉄扉などは酷似しているのに対して、寸法体系は異なっているなどの相違も見られる。

この二つの倉庫の詳細比較については、「類似遺構調査」及び「設計方法の分析」の章において述べるが、二人の技師の間には、設計手法の継承と相違があると考えられる。

第2節 旧本庄商業銀行について

1. 用途変更・それに係る改修箇所について

ここでは、本庄煉瓦倉庫の現在に至るまでの変遷における、用途変更の過程と、それに伴う改修箇所に関して記す。なお、本庄煉瓦倉庫の変遷は、現在不明な部分も多い。そのため以下では、写真や資料等から、その改修が確認できるものについてのみ記述を行うものとする。

1-1. 銀行担保倉庫

明治29(1896)年～昭和18(1943)年

本庄煉瓦倉庫を繭倉として利用していた当時の様子を確認できる写真が、現在2枚判明している。内一枚は明治後期(図3-8)、もう一枚は大正2年(図3-9)に撮影されたものと考えられる。これらの写真から、以下の事柄を読み取ることができる。

- 本庄煉瓦倉庫西側の出入口には、スロープが取り付けられ、上部には木造の庇が架けられている。
- 敷地西側に、木造平屋の事務所が併設されている。

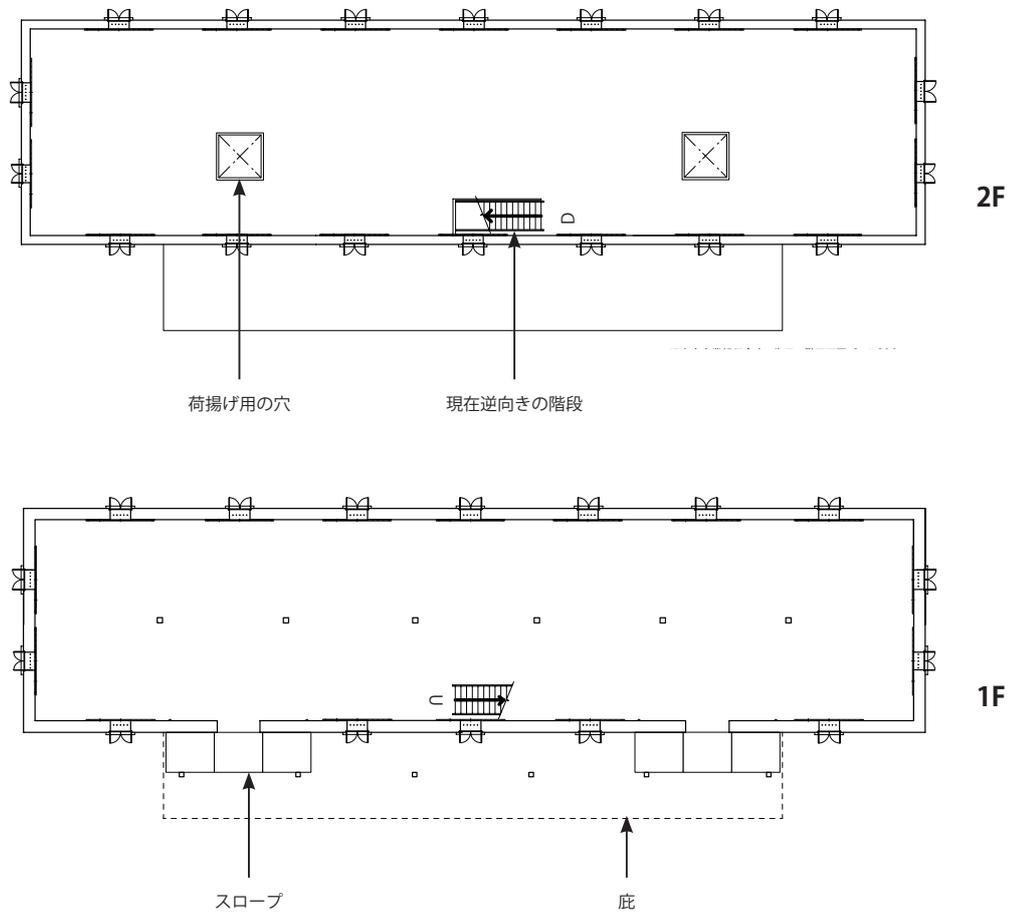


図3-7. 旧本庄商業銀行倉庫 建設当初の復元図面

また、大正初期の写真を確認すると明治後期との相違点として、以下の点が確認できる。

- ・ 本庄煉瓦倉庫外構部分の鉄柵が、増設されている。
- ・ 開口部上部の煉瓦積アーチが白く塗られている。



図 3-8. 建設当初の煉瓦倉庫外観（明治期）

1-2. 民間企業の利用

昭和 18(1943) 年～昭和 52(1977) 年

昭和 18 年、本庄煉瓦倉庫は銀行としての利用を終え、本庄市へ寄託される。その後、民間企業の所有となる。同建造物を所有したとされる、富士瓦斯紡績株式会社・栗豊株式会社が、どのように倉庫を利用していたかは、現在では資料も確認できず、不明である。また、この間にどのような改修が行われたかについても不明である。

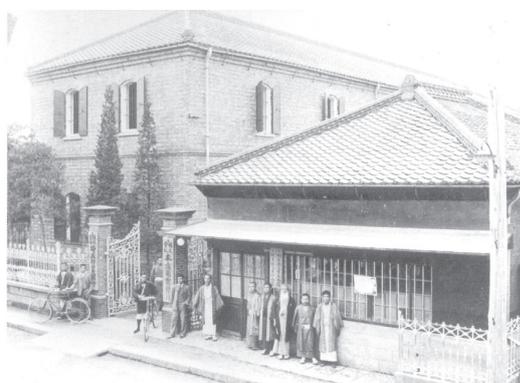


図 3-9. 大正 2 年撮影の煉瓦倉庫外観

1-3. ローヤル洋菓子店

昭和 52(1977) 年～平成 23(2011) 年

昭和 52 年（1977）より、本庄煉瓦倉庫は洋菓子店へと用途変更が行われた。倉庫から店舗への用途変更にともない、特に 1 階部分の大幅な改修が行われたことが、実測・聞き取り調査より明らかとなった。

また、昭和 54 年（1979）に撮影された写真を見ると、洋菓子店店舗部分が中山道側に増築されているのが確認できる。これは、2012 年 7 月現在では認められない。昭和 54 年当時は、本庄煉瓦倉庫内には店舗をおかず、増築部を店舗とし、煉瓦倉庫内は工場・倉庫として利用していた。



図 3-10. 煉瓦倉庫北側への店舗増設

第3節 類似遺構調査

1. 調査概要

本庄倉庫の文化財的評価にあたり、本庄市近郊に現存するいくつかの煉瓦造建造物の事例調査を行った。調査は、2012年の6月5日、6月6日、7月14日の三度にわたり、所有者への聞き取り調査、建物の外部及び内部の見学調査を実施した。

今回、本庄倉庫の類似遺構として、本庄市近郊の群馬県前橋市に現存する旧安田銀行担保倉庫(大正4(1915)年以下、安田倉庫)・上毛倉庫株式会社表町二、三号倉庫(明治29(1896)以下、上毛倉庫)の二つの煉瓦造建造物を調査対象とした。同市は、横浜開港以来の蚕糸業で発展し、明治・大正にかけ、製糸・生糸の町として全国有数の市場となった。

また、煉瓦造建造物の保存活用を試みる上での参考事例として、前橋市に現存する旧大竹家煉瓦蔵(大正12(1923)年)と、本庄市に現存する本庄赤煉瓦ホール(旧小森商店煉瓦蔵、大正10(1921)年)と煉瓦造の民家K邸(大正9(1920)年)の調査を併せて行なった。なお、本庄市内の煉瓦造民家に関しては、個人情報に関わる内容であるため調査内容の記載を割愛する。



図3-11. 類似遺構調査訪問地

① 2012年6月5日(火)

- ・旧安田銀行担保倉庫
所在地：群馬県前橋市住吉町 2-10-2
- ・旧大竹家煉瓦蔵
所在地：群馬県前橋市三河町 1-16-27

参加者：中谷礼仁、本橋仁、百野太陽、福井亜啓、小林千尋、丸茂友里、浦上卓司(以上中谷礼仁研究室)、春田典靖(以上新谷真人研究室)

② 2012年6月6日(水)

- ・本庄赤煉瓦ホール
所在地：埼玉県本庄市千代田 4-2-4
- ・旧大政商店本庄支店
所在地：埼玉県本庄市銀座 3-6-29

参加者：中谷礼仁、本橋仁、百野太陽、福井亜啓、小林千尋、丸茂友里、浦上卓司(以上中谷礼仁研究室)、山田俊亮、春田典靖(以上新谷真人研究室)、木村勉、川崎香織、佐藤美佳(以上長岡造形大学)

③ 2012年7月13日(金)

- ・上毛倉庫株式会社表町2・3号館倉庫
所在地：群馬県前橋市表町 2-25-17

参加者：本橋仁、百野太陽、福井亜啓、丸茂友里、浦上卓司(以上中谷礼仁研究室)、春田典靖(以上新谷真人研究室)

安田倉庫の見学にあたっては、所有者である協同組合前橋商品市場への仲介及び事前資料の提供に関して前橋市教育委員会管理部文化財保護課の宮沢氏よりご助力を得た。また、それぞれの見学にあたっては、協同組合前橋商品市場、上毛倉庫株式会社、前橋市役所 都市計画部 まちづくり課の方々、本庄市役所の方々、「本庄まち NET」代表を務める戸谷正夫氏、そして旧大政商店本庄支店柴崎氏の協力のもと見学調査を行なうに至った。

2. 調査内容

2-1. 旧安田銀行担保倉庫

基本情報

施主	不明
建造年代	大正 4(1915) 年竣工
設計者	不明
当初の用途	繭・生糸等の担保倉庫
現在の用途	「協同組合前橋商品市場」の倉庫
所有者	協同組合前橋商品市場
主構造	煉瓦造(イギリス積み)
建築面積	594.922㎡
延床面積	1,189.844㎡
階数	2階建て
屋根形式	切妻造
小屋組	木造・洋小屋組(キングポストトラス)
屋根葺材料	日本瓦

※上記の基本情報執筆には、以下の資料を参照した。

・財団法人文化財建造物保存技術協会

『第4部 旧安田銀行担保倉庫調査報告書』(1994.3)

分析および考察

旧安田銀行担保倉庫は、梁行長さが6間(11m)、桁行長さが30間(54m)に及ぶ*本庄倉庫よりもさらに規模の大きい煉瓦倉庫である。四方の壁には3間の間隔で柱型が設けられ、アーチ型の開口下部には石材のまぐさ石、開口上部のアーチ中央にはキーストーンが挿入される。また、長手方向の両端においては開口部を設けず、煉瓦壁面に焼過煉瓦を用いて装飾を行なっている。鉄扉は黒漆喰で塗られているなど、色彩表現にも十分に配慮された意匠設計が見受けられる。

本庄倉庫に比べ、梁行を飛ばし、且つ梁のせいを薄くしている。また屋根を支えるキングポストトラスの吊り束は、本庄煉瓦倉庫では木造であったのに対し、鉄製のもの

* 前橋市 都市景観審議会基本計画策定専門部会『前橋市都市景観形成近代建造物 調査報告書』(平成7年3月)

が入る。これにより、トラス全体の緊結を凶っている。

以上のように、全体・細部ともに本庄煉瓦倉庫とは異なる設計施工体制でないかと判断できるが、繭蔵という用途が建造物の性格として共通し、同じ機能を持たせている部分も多いため、本庄倉庫の復原考察において有効である。

倉庫長手方向片側にのみ出入口を設け、庇が長手方向片側に長く付けられている点は、本庄煉瓦倉庫と同様である。また、出入口付近においては、数段の階段が設けられている。こちらは現在の本庄煉瓦倉庫とは異なるが、かつては入口で数段上って入ったという話が聞き取りにおいて判明している。

現在の管理者によれば、今後建物西側部分を倉庫から別用途に転用させることを検討している。なお、切妻面の壁体が、その雨仕舞からか、腐朽している箇所があり、今後の利用にあたって修理・補強の必要があると思われる。



図 3-12. 旧安田銀行担保倉庫西側

2-2. 上毛倉庫二号倉庫・三号倉庫

基本情報

施主	江原芳平
建造年代	明治 29(1896) 年竣工
設計者	岡本鑒太郎
当初の用途	繭糸の担保倉庫
現在の用途	新聞紙や段ボール用紙の保管・配送
所有者	上毛倉庫株式会社 江原毅
主構造	煉瓦造 (イギリス積み)
建築面積	300.785㎡ (二号倉庫) 335.078㎡ (三号倉庫)
延床面積	300.785㎡ (二号倉庫) 670.156㎡ (三号倉庫)
階数	2 階建て
屋根形式	切妻造
小屋組	木造・洋小屋組 (キングポストトラス)
屋根葺材料	日本瓦

※上記の基本情報執筆には、以下の資料を参照した。

- ・上毛倉庫株式会社『上毛倉庫七十年誌』(1966.6)
- ・前橋市 都市景観審議会基本計画策定専門部会『前橋市都市景観形成近代建造物 調査報告書』(平成 7 年 3 月)
- ・松波秀子「明治・大正期の建築作品にみる清水組設計組織その 1」(清水建設研究報告 第 89 号 平成 24 年 1 月)

分析および考察

上毛倉庫株式会社表町二、三号倉庫は、本庄煉瓦倉庫と同じく清水店の岡本鑒太郎によって建設されている。(松波 2012) また、その建設年も本庄煉瓦倉庫とほぼ同時期である。調査に際しては、実測を行い本庄煉瓦倉庫との比較を行った。その結果、二号倉庫においては短手方向の外法が 10.031m、長手方向の外法が 35.607m、三号倉庫においては短手方向が 10.059m、長手方向が 31.915m であった。また、本庄煉瓦倉庫と同様に、外壁には軒蛇腹、胴蛇腹が見受けられ、建物の立面構成は極めて近い。また、開口部の鉄扉は各部寸法、構造

ともに本庄煉瓦倉庫と一致し、両倉庫において同型の鉄扉が採用されていると判断した。また、石材のまぐさ石の寸法も、ほぼ一致することが確認された。一方、上毛倉庫が切妻屋根を採用している点は、本庄倉庫と大きく異なる。

本倉庫においては、尺貫法が採用されていることが確認でき、1 階柱間の間隔が三間 (実測値 5,461mm)、梁間が一間 (実測値 1,824mm) であった。小屋組の梁間*は、約 2,130mm で、本庄倉庫とほぼ同じである。

* 現在、天井が貼られていたため、一部分小屋組が見ることのできる部分において実測を行った。



図 3-13. 上毛倉庫三号倉庫

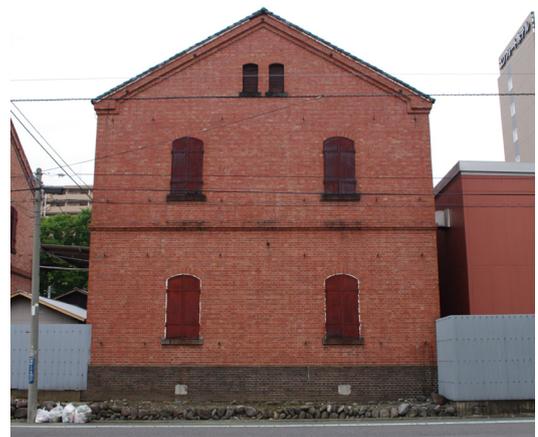


図 3-14. 二号倉庫東側立面

2-3. 旧大竹家煉瓦蔵

基本情報

施主	曾田軍平
建造年代	大正 12(1923) 年 竣工
設計者	若山庄次郎
当初の用途	醸造蔵
現在の用途	空き家
所有者	前橋市土地開発公社
主構造	煉瓦造 (イギリス積み)
建築面積	251.81㎡
延床面積	503.62㎡
階数	2 階建て
屋根形式	切妻造
小屋組	木造・和小屋組
屋根葺材料	日本瓦

※上記の基本情報執筆には、以下の資料を参照した。
 ・前橋市 都市景観審議会基本計画策定専門部会
 『前橋市都市景観形成近代建造物 調査報告書』(平成 7 年 3 月)
 ・前橋市教育委員会 文化財保護課
 『旧大竹家煉瓦蔵文化財調査報告書』(2006)

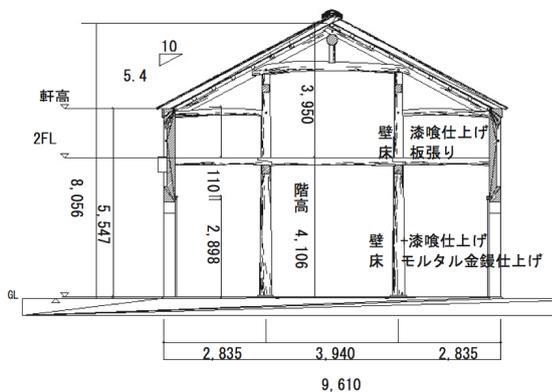


図 3-15. 小屋方向断面図



図 3-16. 蔵外観

分析および考察

旧大竹家煉瓦蔵は、かつて造り酒屋の醸造蔵として建設された倉庫である。本倉庫は、2006 年に前橋市土地開発公社を窓口とし、保存と活用を目的として土地及び建造物が購入された。現在前橋市まちづくり課を中心に、市の重要な文化財として、補強・活用が検討されている。^{*}

煉瓦造であるが、小屋組を和小屋とし、他の類似遺構とは異なる形式を持つ。それゆえ、旧大竹煉瓦蔵と本庄煉瓦倉庫とは、小屋組と煉瓦造との取り合いが大きく異なる。本庄煉瓦倉庫等のトラスを用いた一般的な煉瓦造においては、煉瓦壁体の上に敷桁を置き、その上に陸梁を架ける。さらに、それらを端母屋によって抑える形式である。一方、大竹家煉瓦蔵では、煉瓦壁体を一部穿ち、そこに小屋梁を直接のせている。

上記の小屋組を構成する材には、未製材が用いられている。これは、全て製材により建設された本庄煉瓦倉庫とは対照的である。ここに本庄煉瓦倉庫との、技術や資本の差が表れていると推察される。また、建物の各部分の寸法に関して尺貫法が採用されていることが確認された。

まちづくり課の職員に聞くところによると、具体的な今後の用途についてはまだ明確に定まっていないが、とりあえず建物の安全性を確保するための最低限の補強を検討しているとのことであった。

^{*} 2009 年には、まずこの建造物を地域住民に周知するための暫定利用として、前橋市内の七夕祭りの開催と併せて、煉瓦蔵祭りが敷地内において開催された。さらに近年においては、大学との連携が見られ、2011 年には前橋工科大学石田敏明研究室による、再生・利活用に関する調査報告書が作成されている。

2-4. 本庄赤煉瓦ホール

基本情報

施主	不明
建造年代	大正 10(1921) 年
設計者	不明
当初の用途	小森商店煉瓦蔵
現在の用途	多目的ホール
所有者	戸谷正夫 (本庄まち NET)
主構造	煉瓦造 (イギリス積み)
建築面積	70.36㎡
延床面積	70.36㎡
階数	以前は 2 階建、現在は平屋 (一部ロフト)
屋根形式	切妻造
小屋組	木造・洋小屋組 (キングポストトラス)
屋根葺材料	日本瓦

分析および考察

本庄赤煉瓦ホールは、本庄市小森商店の煉瓦蔵を利用し、市民へ向けた多目的ホールへと再生活用した事例である。小森商店は、明治 43(1910) 年に本庄市宮本の中山道に面した敷地において開業した。本煉瓦蔵は「本庄まち NET」代表を務める戸谷正夫氏によって 2010 年に改修された。元々 2 階建てだったものを、音楽ホールへと用途変更するにあたり、2 階床を大きく縮小した。また、残した部分についても天井を低くすることで、1 階のみの利用とし、建築面積を調整するなどの工夫が見られた。

同敷地においては歴史的な蔵づくりの建物群が多く残されている。これらの歴史的景観を保存し、町の魅力を伝えようと、「本庄まち NET」のメンバーによって敷地全体の再生活用が計画された。また、本プロジェクトにおいては早稲田大学の教員、市、県の職員による支援が行なわれている。



図 3-17. 赤レンガホール内部



図 3-18. 赤レンガホール正面

第4節 煉瓦の製造元について

1. 本庄煉瓦倉庫の煉瓦の製造元

本庄倉庫に用いられている煉瓦の製造元については、既往研究^{*}では倉庫の立地と建設年代から、埼玉県深谷市上敷免に明治22（1889）年に工場を建設した日本煉瓦製造の製品である可能性が高いとされていたが、その製造元を示す刻印は見つかっていなかった。

今回、煉瓦の目地強度を調べるために採取したサンプルコアから、煉瓦の製造元を示す刻印がなされている煉瓦が見つかった。図3-19.の、円形の枠の中に「上敷免」の文字が読み取れる。このことから本庄倉庫

^{*} 埼玉県の近代化遺産—近代化遺産総合調査報告書—。埼玉県教育委員会。1996。

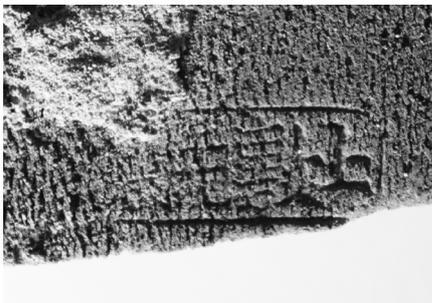


図3-19. 見つかった上敷免製の刻印

の煉瓦が日本煉瓦製造のものであることが判明した。

2. 日本煉瓦製造の当時の状況

既往研究によれば、本庄煉瓦倉庫が建設された当時は、日本煉瓦製造株式会社の大口買い付け先だった碓氷線（現在の信州本線）の碓氷トンネル工事がほぼ完了したため、その余剰煉瓦が一般市場に出回り始めた時期であることが指摘されている。

また、明治28（1895）年の5月には、上敷免の工場と日本鉄道深谷駅（現在の高崎線深谷駅）を連絡する専用鉄道が敷設されている。これにより、当時深谷駅と同線の本庄駅まで、煉瓦を鉄道で一貫輸送することが可能であったことも判明している。このような当時の煉瓦生産工場の状況も、本庄煉瓦倉庫の成立の大きな要因であると思われる。



図3-20. 本庄倉庫と上敷免工場の位置関係

年代	日本煉瓦製造の沿革	業界・一般
明治20（1887）.10	日本煉瓦製造会社設立	
明治21（1888）.1	清水店と工場建設請負契約締結	
明治22（1889）.9	上敷免工場完成	
明治24（1891）.2	碓氷峠鉄道工事事用煉瓦五〇〇万個を受注	
明治24（1891）.10		濃尾大地震
明治24（1891）.12	碓氷峠鉄道工事事用煉瓦七五〇万個を追加受注	
明治26（1893）.4		碓氷峠アプト式鉄道開通
明治26（1893）.8	社名を日本煉瓦製造株式会社に変更	
明治28（1895）.5	深谷～上敷免間鉄道敷設	

図3-21. 本庄倉庫建設以前の日本煉瓦製造の沿革

第5節 設計方法の分析

本節では、本庄煉瓦倉庫の設計方法に関して分析をおこなった。

同建物の建設当時・明治中頃の日本では、一般的に建築物に対して尺貫法、メートル法、ポンド・ヤード法の三種の単位系の混用がみられた。すでに明治21(1888)年には、これら単位系を統一すべきであるという要請が『建築雑誌』上に掲載されるほどであった。^{*}

これは、煉瓦造の建造物においても例外では無い。明治5(1872)年の富岡製糸場ではメートル法と尺貫法、明治21(1888)年の鉄道寮新橋工場にはポンド・ヤード法が用いられていることが確認されている。また、本庄煉瓦倉庫と同地域である旧大竹家煉瓦蔵では、尺貫法が用いられている。よって、煉瓦造に関しては地域的、また時代的な特徴をあげることも出来ない。

本庄煉瓦倉庫には、現在のところ設計時の図面等の存在は確認されていない。唯一、前掲写真帳の裏面に掲載されている簡易的な図面のみが掲載されているのみである。しかし、この図面も、実際とは開口部位置などにずれがあるなど、その精度は高くない。そのため、これは参考程度とし、実測寸法の分析により、本庄煉瓦倉庫の寸法体系について考察を行った。

1. 全体寸法

本庄煉瓦倉庫の全体像を形作る部材から、最初に検討を行う。対象とするのは、本倉庫煉瓦壁長さとお開口部間、木造軸組部の1階柱間、2階床梁間、2階屋根小屋組間である。これらを対象とし、実測値を各単位系へと変換する。その結果より、全長の計画において以下のことが判明した。

1-1. 外壁全長

外法において、長手120尺^{*}、30尺という尺貫法において割のいい数値に近い値を取ることが判明した。

^{*} 尺貫法における「尺」とポンド・ヤード法における「フィート」は、ほぼ同じ数値をとる単位系である。よって、ここでは両者の可能性を残しつつ、検討をすすめる。

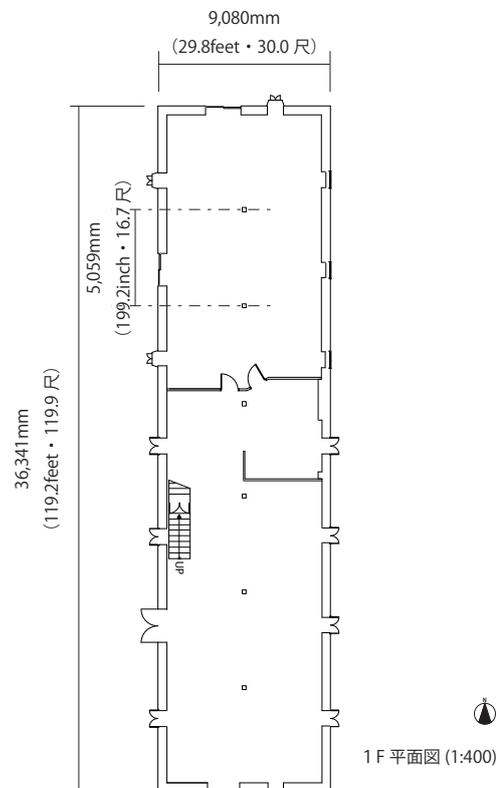


図3-22. 各部寸法1

(上部、mm表記 下部、インチ・尺表記)

^{*} 青木 庄太郎. 石材寸法二付意見. 建築雑誌, v.2 n. 15. 1888.

1-2. 開口部間（出入口をのぞく）

尺貫法における、13 尺という単純な数値に近い値を取ることが判明した。

1-3. 木造軸組部

1 階柱間 ポンド・ヤード法における、200 インチという単純な数値に近い値を取ることが判明した。

2 階床梁間 尺貫法における、1 間という単純な数値に近い値を取ることが判明した。

2 階小屋組間 変換値の読み取りだけでは、いずれの単位系においても、単純な数値へと還元することは出来なかった。

これら実測調査の数値の性格を前提として、次節以降に各部材と煉瓦積みの関係から、統一的な設計寸法計画の分析をすすめる。

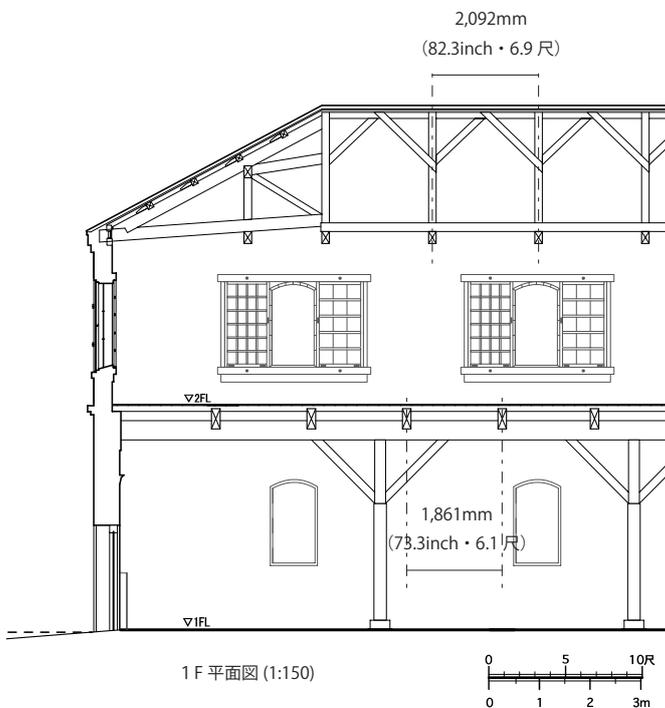


図 3-23. 各部寸法 2
(上部、mm 表記 下部、インチ・尺表記)

2. 煉瓦壁と木造軸組

まず煉瓦壁と木造横架材の関係性を検討する。検討の対象とするのは、2 階床梁と、煉瓦壁との接合部である。接合部の写真を以下に掲載した。2 階床梁は、煉瓦壁に挿入される様に組み合わされている。その際、煉瓦壁の一部をまぐさ石に置換え、その上に梁が乗せられている。また、梁は煉瓦壁外側より、金具による固定がなされている。よって、煉瓦壁と木造軸組の関係が検討できる箇所として、分析をすすめた。



図 3-24. まぐさ石の状況



図 3-25. 煉瓦壁と木造軸組の関係

2-1. まぐさ石と煉瓦壁

解体実測調査により、まぐさ石は内壁の煉瓦を一部置き換えて、嵌められていることが判明した。まぐさ石の大きさは、幅480mm・高さ210mmである。これは、本庄煉瓦倉庫に使われている煉瓦の、長手2枚分、高さ3.5段分にあたる。

まぐさ石の配置が、煉瓦積みと密接な関係があることは上記より明らかである。よって、まぐさ石に乗せられた2階床梁も、煉瓦壁と寸法体系において関係を持つものと考察できる。



図3-26. 小梁と煉瓦壁 取り合い部分写真

2-2. 金具と煉瓦壁

前述のとおり、まぐさ石と煉瓦壁との関係は、内側から見る事が出来ない。一方、煉瓦壁外側より梁を留める金具は、外観において確認ができる。そこで、この金具と煉瓦壁との関係により、梁・金具・煉瓦の積み方を考察した。

金具は図と写真から分かるように、長手段の煉瓦に乗せられて挿入される。金具が乗せられた長手煉瓦と、次の金具位置の長手煉瓦までは、おおよそ8枚分。ここで1の実測結果より、この梁間は、ほぼ1間（6尺・1,861mm）に近い値を取ることが分かっている。

よって、煉瓦の積み方において、目地の長さを含め煉瓦8枚分を1間とするモジュールの可能性を指摘できる。



図3-27. 外壁に確認できる金具

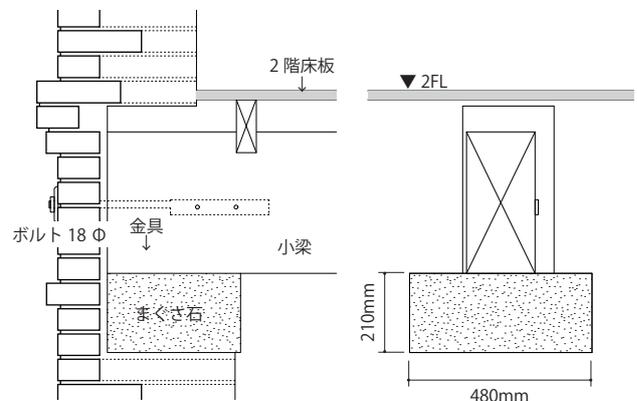


図3-28. まぐさ石部分 模式図

3. 煉瓦積のモジュール

前述のように、煉瓦壁と木造軸組との関係性が判明した。次に、煉瓦の積み方自体の分析を試みた。以下で述べるように、本倉庫では開口部付近において長手段に、小口煉瓦を挿入する特徴がみられる。この特徴をもとに、本倉庫における煉瓦積みの方法を考察する。

3-1. 開口部廻りの煉瓦配置

本庄煉瓦倉庫開口部周りにおいて、煉瓦の積み方に次のような工夫が見て取れる。図は、その一例である。

開口中は、煉瓦長手4枚分である。一般にイギリス積みは、長手積、短手積の煉瓦を、1/4枚分ずらしながら交互に積み上げる方法である。そのため、煉瓦偶数枚分の開口部を設けると、開口部両側の煉瓦の片側に七五煉瓦、もう片側に羊羹煉瓦を用いる必要が生じる。しかし、同建造物では、長手積段の図の箇所、短手煉瓦を一つ挿入していることで、長手積の段を煉瓦半枚分ずらし、開口部両側を七五煉瓦で揃えるという方法をとっている。

羊羹煉瓦は、高さが巾に比べて大きい煉瓦であり、煉瓦の安定性に欠ける。さらに、

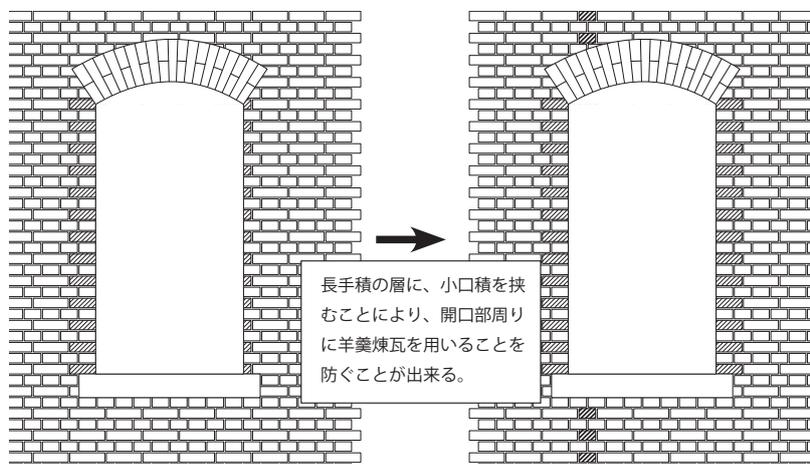


図 3-30. 本庄煉瓦倉庫における開口部周りにおける煉瓦の積み方 (一例)



図 3-29. 本庄煉瓦倉庫 開口部

開口部に用いる煉瓦としては脱落の可能性も高い。そのため、このような工夫によって、開口周りを七五煉瓦とすることにより、開口部の安定性につながる。この工夫は本倉庫の設計者周辺による独自の手法とすることができる。煉瓦造の弱点を克服しようとした価値ある工夫として歴史的にも高く評価されよう。

本庄煉瓦倉庫において、小口煉瓦の入れ方には、数パターンが確認できる。^{*}次項では、このパターンを利用して、煉瓦積みの方法論について考察を行う。

^{*} 類似以降である上毛倉庫においても、小口煉瓦の挿入が見られる。その方法を、図 3-31 に示した。

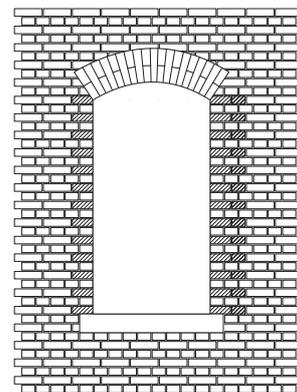


図 3-31. 上毛倉庫の場合 (一例)

参考1・イギリス積み長手段への小口煉瓦の挿入

長手段への小口煉瓦の挿入について、個別の分析をおこない、本庄煉瓦倉庫の特異性を明らかにした。

1. 小口煉瓦挿入の類似例

今回、小口煉瓦の挿入がみられた開口部周りの煉瓦組積法において、類似事例の有無に関して調査を行った。その結果、小口煉瓦が長手段に挿入される事例は各地に散見された。時代性や地域性など詳細は不明であるが、開口部周りに不安定な羊羹煉瓦を利用しない工夫として、一般に用いられる方法である可能性も指摘できる。

2. 本庄煉瓦倉庫の特異性

前述の遺構において、小口煉瓦が挿入されているのは、開口部の周囲のみである。これは前述の上毛倉庫においても同様である。一方、本庄煉瓦倉庫においては、この方法と以下の点で異なる。

- 長手段の小口煉瓦は、腰壁を除いた煉瓦壁の下端から上端まで通しで挿入されている
- 他類似遺構においては、小口煉瓦は開口部範囲の外側に挿入されるが、本庄煉瓦倉庫においては開口部範囲の中において挿入されている。

上記の2点は、本倉庫の設計における煉瓦積みの特異性と考えられる。

3. 岡本荃太郎の設計思想との関連

設計者の一人である岡本は、明治42(1909)年に「紡績工場の建築に就て」という講演を行なっている。その抜粋を下に示した。ここでは、生糸の品質に影響する温湿度の管理を、紡績工場建設における最優先事項としている。繭倉である本倉庫の設計に際しても、温湿度に対して細心の注意を払っていたものと考えられる。

4. 結論

後述の煉瓦積の分析で述べるように本倉庫には、小口煉瓦の対称性という特徴が指摘できる。開口部の設計に必要な小口煉瓦が、全体計画において対称性を示している事実は、全体計画において開口部の配置が全体性を決定しているものと考えられる。

(前略) …是から先き紡績工場の建築をするには益々研究的のことが必要になって来るだらうと思ひます、先づ紡績事業に於て益々精巧な糸を採りさうして立派なものにして外國に出して競争して行かうと云ふには何が一番必要であるかと云ふことを一つ考えの中に置かねばならぬ、それは何かを云ふと、熱度と湿度であります、此熱度と湿度とが輕重を得て四時變り無しに一定して居つたならば糸も全く一定したものが出来るに違ひない、又紡績業者も頻に之を希望して居りますが、…(中略) 是は管理事業として立つ以上は一番大切な品物の出来榮えに関係しますから、一番大切な事項であらうと思ひます、然し絶縁して實際内外を分つと云ふことは建築状随分むづかしいので、どうも今日の所では云ふ丈けで出来ない問題であります。(以下略)

「紡績工場の建築に就て」

『建築雑誌』23巻 269-270号、1909

3-2. 小口煉瓦挿入のパターン

前項で述べたように、本倉庫では開口部周りにおいて、長手積みの段に小口煉瓦を挿入するという特徴があった。この開口部周りにおける小口の入れ方には、図のような2つのパターン、またその左右反転のパターンを確認することが出来た。これらのパターン配置をもとに、煉瓦積みの分析をおこない、その計画方法について考察をおこなった。

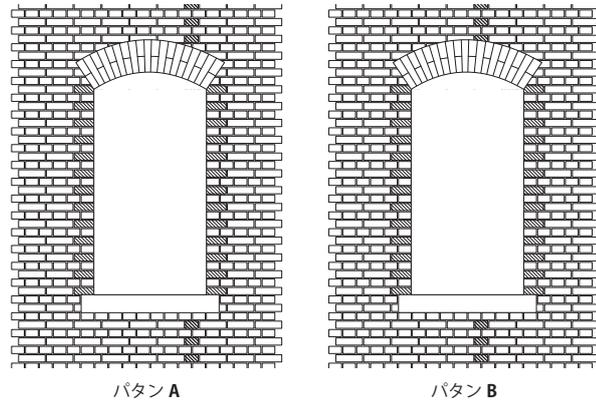


図 3-32. 小口煉瓦挿入のパターン

煉瓦積み分析 妻側

妻側におけるパターン配置は、図 3-33 の通りであった。小口煉瓦の挿入部分を確認すると、その煉瓦の積み方が妻面外壁の芯より対称形をとっていることが分かる。調査の結果より、妻側の煉瓦積みは次のように計画されていることが判明した。

1. 煉瓦壁の中心に小口煉瓦が配置された。
2. これを対称軸として煉瓦が配置された。

そのため、開口部周りの小口煉瓦も、その配置が鏡像体となっている。

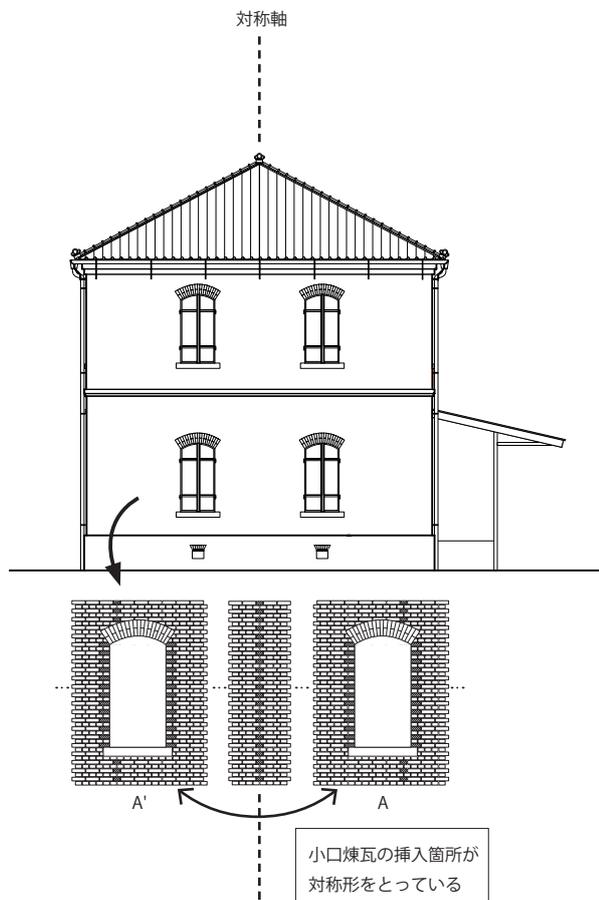


図 3-33. 煉瓦積み分析 妻側 (北)

煉瓦積み分析 平側西立面

平側西立面におけるパターン配置は、図3-34の通りであった。平側は、東立面と西立面における煉瓦配置が、それぞれ異なる。まず、西立面に関して説明を行う。

西立面においては、開口部周りの小口煉瓦の配置は、出入口1と出入口2、またその上部に位置する開口部を除いて、すべて同じパターンを取り、その配置は等間隔に配されている。一方、出入口1と出入口2の開口部周り小口煉瓦の配置は、対称形となっている。調査の結果より、平側西立面の煉瓦積みは次のように計画されていることが判明した。

1. 出入口部、またその上部の開口部を除き、すべての開口部は1種類の煉瓦積み形式Aを持つパターンAである。
2. この開口部位置は、対称形となるように1、2階ともに配置された。
3. 出入口部分は、煉瓦の積み方を対称形とするように、小口煉瓦も配置された。

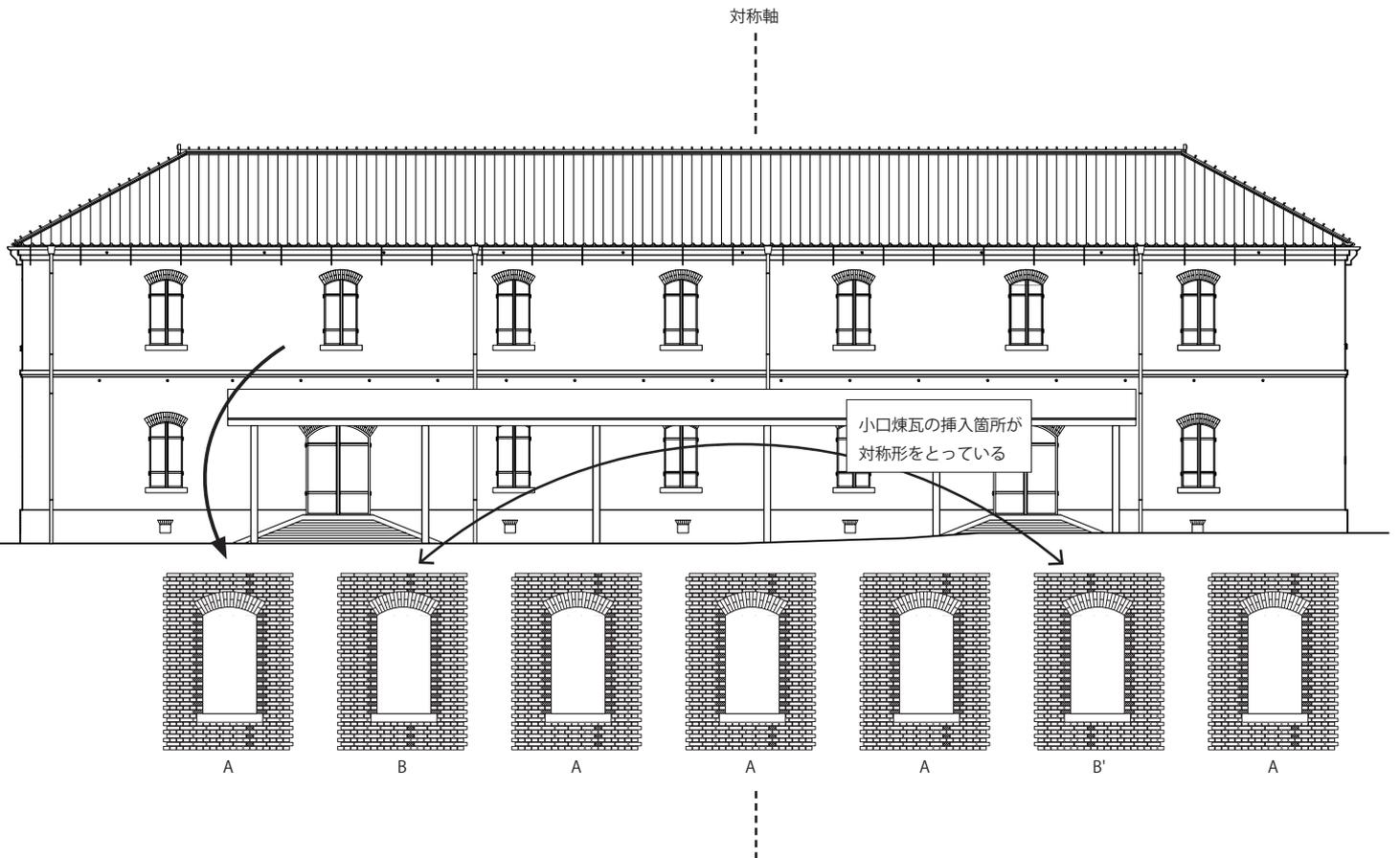


図3-34. 煉瓦積み分析 平側（西）

煉瓦積み分析 平側東立面

東立面においては、パターンの配置に規則性を見出すことが出来なかった。また、開口部の一部には、小口煉瓦の入れ方が、2つのパタンの混用されているものも見られた。これらのパターン配置から、次のような考察をおこなった。

前述のように、本庄煉瓦倉庫における正面の役割は、西側立面が担っていた。そのため、腰壁等において焼過ぎ煉瓦が用いられない、隅部において羊羹煉瓦を利用しているなど、他の面に比べて装飾意識に乏しい。よって、パターン配置の不規則性も、東立面を裏側として、装飾的な意識を欠いたものとして考えられる。



図 3-35. 煉瓦積み分析 平側（東）の一部

3-3. 妻側と平側の煉瓦配置

以下に、これまで個別に扱ってきた妻側と平側の煉瓦配置の関係性について考察する。

開口部位置を煉瓦枚数で確認すると右図のようになる。ここで、妻側煉瓦壁の大きさの1/2を平側に展開すると、隅部から開口部1を含む長さにあたるのがわかる。またこの位置は、本庄煉瓦倉庫においては入母屋屋根の陸棟端部にあたる。この入母屋位置頂点が、妻側で決定がなされることにより、小屋組の間隔を決定することができる。その詳細を次節に記す。

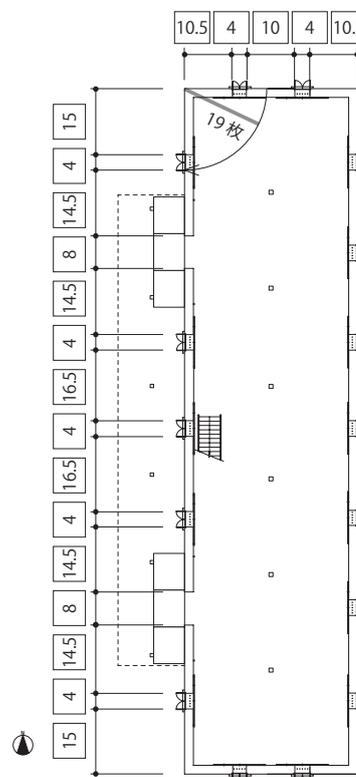


図 3-36. 煉瓦枚数の分析

3-4. 小屋組の間隔

実測調査の結果からでは、小屋組（キングポストトラス）の桁行間隔に対する単位系は判然としない。一方、実測結果から小屋組の間隔は、高い精度で等間隔に配置されていることがわかる。そのため、設計者はなんらかの計画をしているものと推察される。結果として、小屋組の桁行間隔は絶対数にする寸法規定ではなく、「～割」といった分割による寸法規定であった可能性が高い。以下、明治期におけるトラスの導入過程について触れておく。



図 3-37. 本庄煉瓦倉庫のトラス

明治におけるトラス

日本においてトラスは、幕末期に導入され、その後急速に普及した。明治4(1872)年には大阪造幣寮、明治5(1873)年には富岡製糸場が相次いでトラス構造で建設された。一方、明治初期においてトラスの構造理論は世界的にも確立されていたとはいえない状況であった。トラス構造の理論的発達は、1847年アメリカでトラス橋に関する著書が出版されたこと発すると考えられている。^{*}その後、ヨーロッパ等でも研究が続けられ、理論の確立は、1910年頃、日本の明治40年頃と考えられている。よって、本庄煉瓦倉庫が竣工した明治29年においても、トラス

^{*} 日本建築学会. 近代日本建築学発達史. 1972.

スの寸法を決める確立された方法論は曖昧であったと考えられる。

明治期技術書におけるトラスの寸法決定

ここではトラスの間隔を決定する要因について、当時発刊されていた技術書を参照する。ここで参照するのは、明治21(1888)年発刊の『建築学階梯 卷之中』(中村達太郎. 明治21. 米倉屋書店.)、である。著者である中村達太郎は、明治21(1888)年から明治24(1891)年にかけて清水店の技師長代行もつとめており、本庄煉瓦倉庫計画時の、清水店の技術標準を知りうる、分析に相応しい資料と考える。ここでは、「棟束小屋」としてキングポストトラスについて解説されている。

棟束小屋 (King-Post Roof) 前條陳述したる諸小屋を梁間の廣き所に用ふれば屋脊上の重量を支ふるに… (中略)

小屋組は八尺間乃至十尺間に置渡し其上に母屋を架し以て椽を受けしめ椽上に裏板を張るなり

棟束小屋組は張間五間以下の所に用ふべしまた各材の大きさは編末に載す

(以下略)

『建築学階梯 卷之中』(中村達太郎. 明治21. 米倉屋書店.)

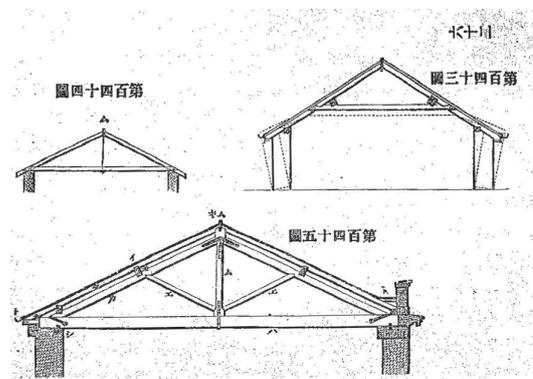


図 3-38. 『建築学階梯』における棟束小屋の図

『建築学階梯 卷之中』(中村達太郎. 明治21. 米倉屋書店.)

「各材」の大きさについては、文中において指示されているように、図 3-39 が掲載されている。ここでは、小屋組の間隔を 10 フィートとした表となっている。小屋組の間隔が異なる場合に関しても、その数式に寄って求められるようになっている。

また、明治 31(1898) 年に出版された滝大吉『建築学講義録 巻の二』では、小屋組間隔が「六尺」「十尺」「十二尺」の場合に分けて表が掲載されている。本煉瓦倉庫においては、2,092mm であるため、「六尺」の表を掲載した。本表に掲載される部材寸法と、本煉瓦倉庫を比較すると、全ての材において本庄煉瓦倉庫は、記載されている部材よりも大きいものが用いられている。

よって、ここで小屋組の間隔は部材の大きさに深く関係することが明らかとなった。これは換言すると、部材の大きさにより小屋組の間隔は、相対的に調整できることを示していると考えられる。

本庄煉瓦倉庫におけるトラスの寸法決定

以上より、次のことが判明した。

- ・実測調査→小屋組の間隔が均等割配置されている
- ・文献調査→部材の大きさにより、小屋組の間隔は可変である

前節で述べたように、ここで陸棟の長さが妻壁の大きさにより決定している。よって、この決定された陸棟を、妥当な数で等分割し、それにみあった部材の大きさを割り出したものと考えられる。

Figure 3-39 consists of two tables, Table 6 (left) and Table 7 (right), from the book 'Building Science Lectures, Volume 2, 1898'. Both tables are titled '建築学講義録' and '表' (Table). Table 6 is titled '表六' and Table 7 is titled '表七'. The tables list various truss members (e.g., 11尺, 12尺, 13尺) and their corresponding dimensions in feet and inches. The tables are arranged in a grid format with multiple columns and rows.

図 3-39. トラス部材に関する表
滝大吉 . 建築学講義録 巻の二 . 1898.

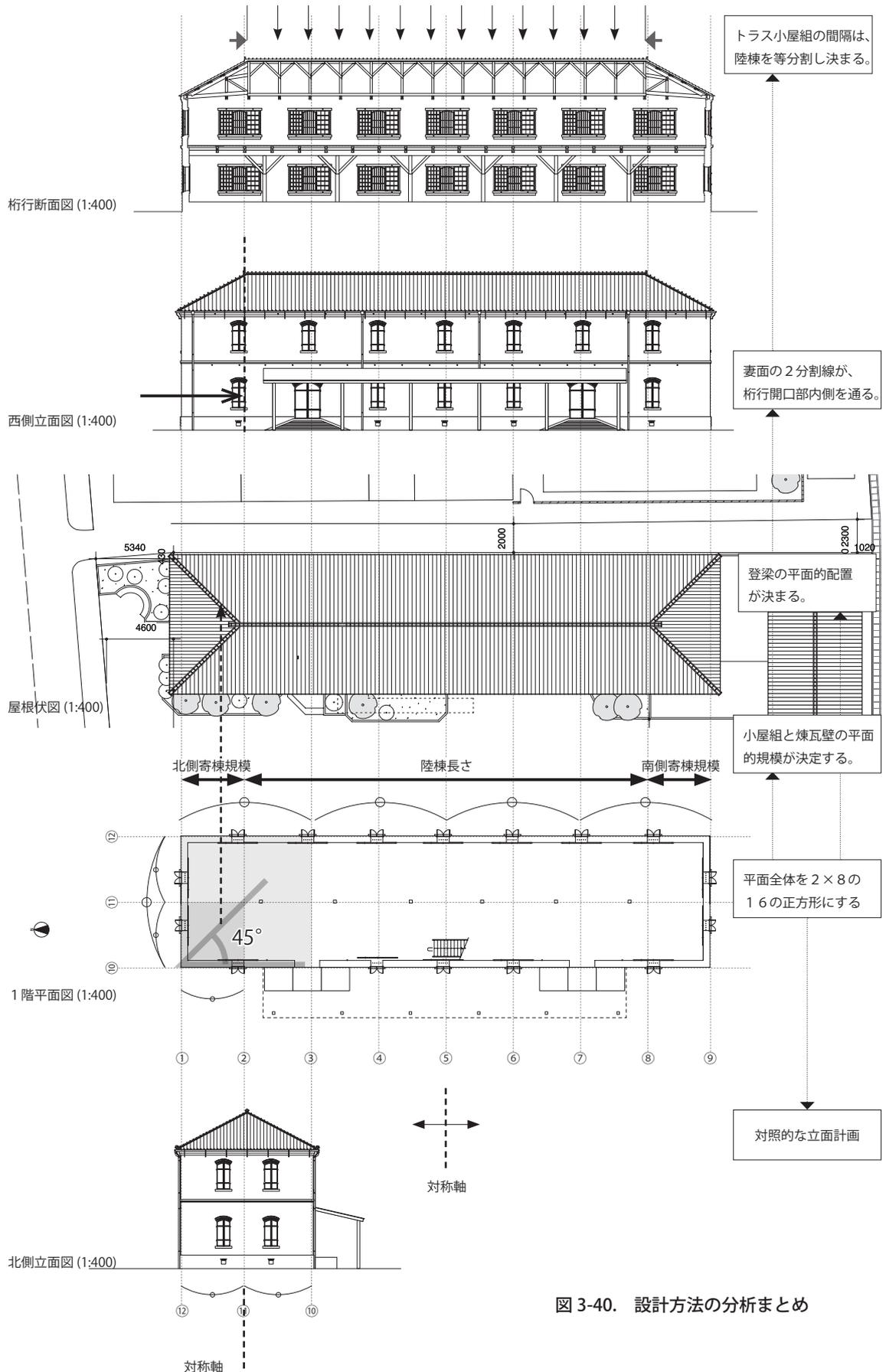


図3-40. 設計方法の分析まとめ

参考 2・『清水方建築家屋撮影』記載図面からの検討

本庄煉瓦倉庫建設時の図面は、その存在を確認されていない。本倉庫の建設当初を窺い知れる資料としては、前述の通り清水建設所蔵の『清水方建築家屋撮影』がある。本資料は、両面に建造物の情報が記載されている。表面には、建設当初と思われる写真と構造形式等が書かれている。裏面には、簡単な概略を示した図面が描かれている。建設時の寸法計画を考察する上で、はじめにこの図面の分析を行った。

1. 資料の記載内容

まずはじめに、図面の書かれた『清水方建築家屋撮影』裏面に記載されている事項について確認する。

全体の構成は、右図のとおり。

以上のように、本資料に描かれているのは平面図のみ。断面図や立面図等は描かれていない。また、スケールバーは描かれており、尺貫法での表記がなされている。これらの情報をもとに平面図の分析をおこない、寸法計画について考察をおこなった。

2. 平面図の分析

スケールバーには寸法が尺寸で表記されている。「0」から「80尺」まで、算用数字で目盛が振ってある。これをもとに、平面図に書かれた各部寸法を計測した。

まず、煉瓦壁で構成される、全体規模と開口部位置について検討をおこなった。結果、開口部において特徴的な点が見られた。桁行方向、各開口部間の芯々の寸法が15尺(二間半)となった(妻行方向では、11尺であっ

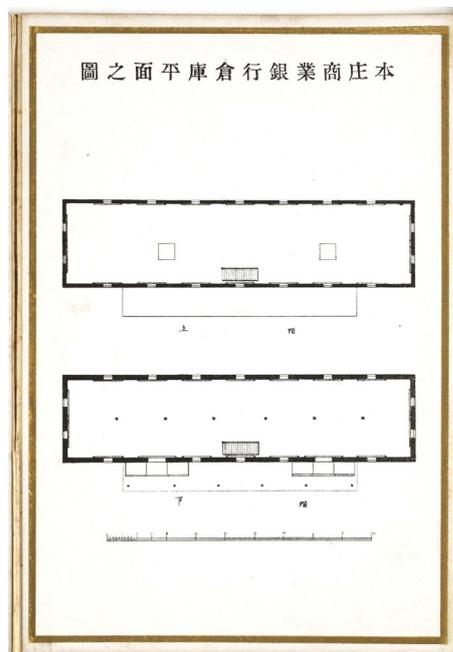


図 3-41. 『清水方建築家屋撮影』裏面

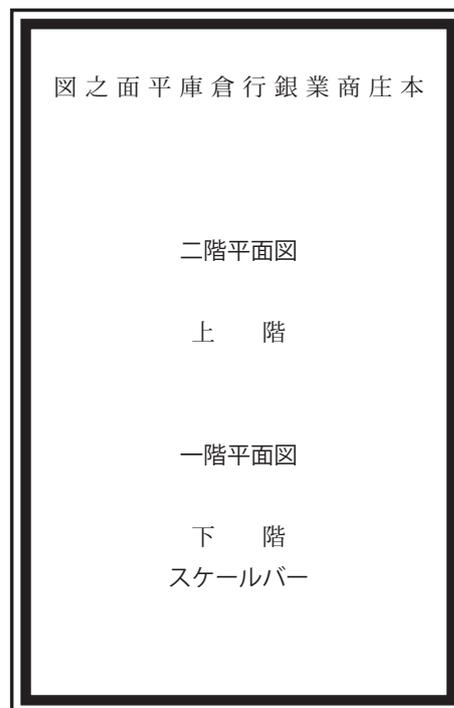


図 3-42. 『清水方建築家屋撮影』裏面読み下し

た)。また、煉瓦倉庫全体では桁行20間(120尺)×妻行5間(30尺)と、ともに間として換算して整数の値をとる。

つぎに、2階の床を構成する木造軸組について検討をおこなった。木造軸組で、本資料からその大きさを読み取ることの出来るものは、1階の中心軸を構成する柱のみである。しかしながら、それらは図のように、尺貫法のスケールバーとの対応が見られない。

以上のように、図面の分析から、煉瓦壁はメートル法で計画されていると考えられる。しかし、この図面は大変簡易かつ小さな図面である。そのため、分析の精度は高くない。よって上記の指摘は、あくまで可能性の域を出ない。そのため、次に実際の計測値からの分析をおこなった。

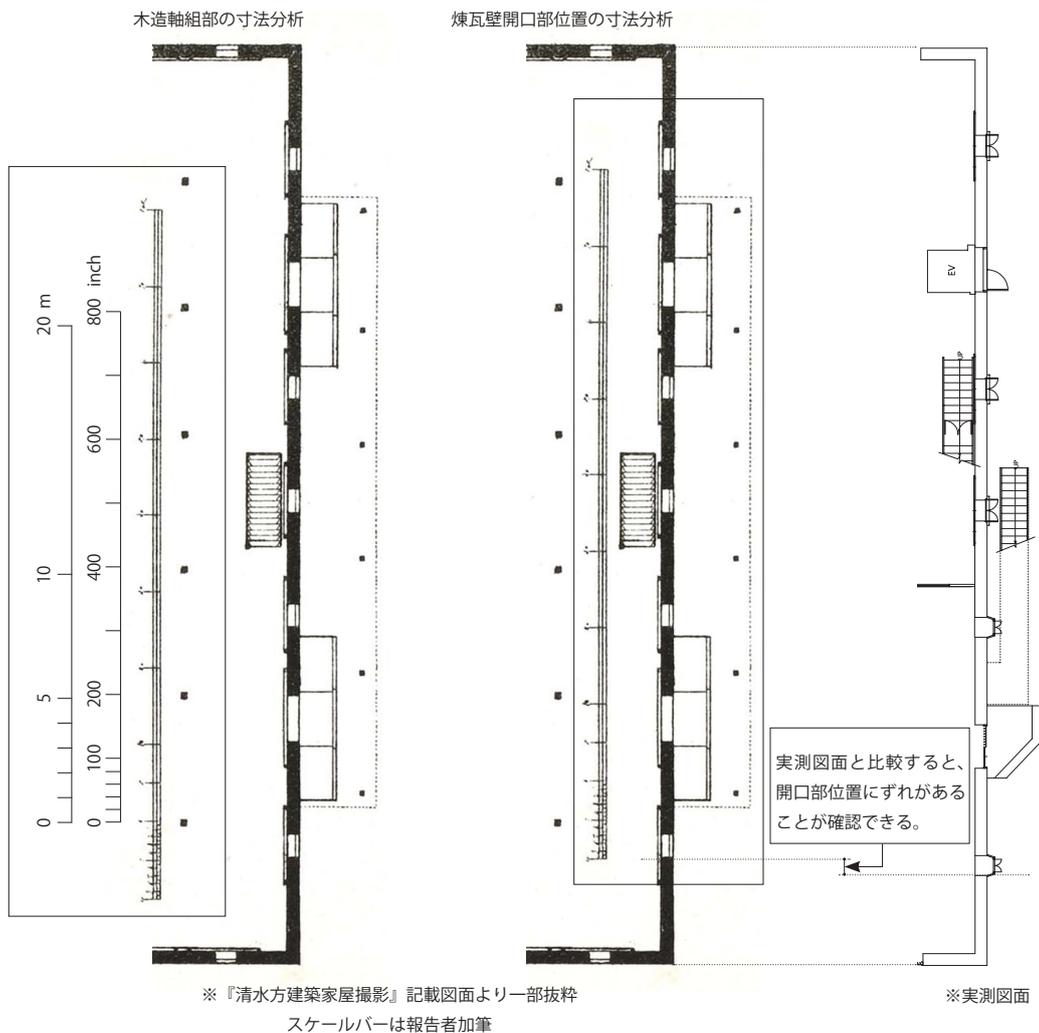


図 3-43. 各部寸法計画の分析 1:300

4. 断面計画

本庄煉瓦倉庫は、1、2階ともに繭蔵として設計された。以下に、繭蔵としての断面的特徴を記す。

- 繭の保管という機能上建物内の通気性を高める必要があるため、1階の窓下には通気口を各階に窓を設け、換気を行う。
- 床から梁下までの高さは1、2階ともに3.2mである。また竣工当初、痕跡より1階はGLより600mmほど高くなっていたと考えられる。^{*}
- また、これにより保管繭を地盤面の湿気から保護していたと指摘できる。
- 2階床には荷揚げ用の開口が2カ所開けられており、1階入口から搬入された物品はこの荷揚げを用いて2階へ搬入されていたと考えられる。また、荷揚げ用の開口は、倉庫西側に寄って取り付けられていた。これは出入口を考慮したものであると指摘できる。

^{*} 1階の柱には東石上端より365mmの位置に大引がはめ込まれていた切欠きがあることから1階床高さを判断した。

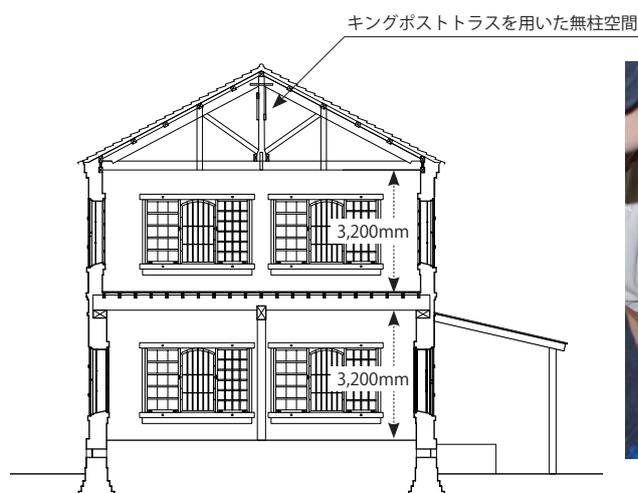


図 3-44. 煉瓦倉庫 復元断面図



図 3-45. 解体実測調査によって確認された開口部下の通気口

5. 細部計画

5-1. 開口部の建具

開口部には、繭蔵という建築用途に必要な諸条件を満たすための工夫が見受けられる。

それぞれの窓には漆喰板戸と網戸が併置されて、窓上下に取り付けられた板材に嵌められている。これらを用いて、倉庫内部の湿度を細かに調整していたことがうかがえる。これについては、1階出入口においても、同様の形式が取られていたと思われる痕跡がある。また、各窓には鉄柵が取り付けられ、外側は鉄扉としている。これらは防火や防犯のためと考えられる。

このように、本庄煉瓦倉庫においては繭保管のため通風を確保するという性能上、多くの開口部が設けられている。同時に、防犯や防火といった問題を、開口部において様々な工夫を凝らす事で解決していることが伺える。

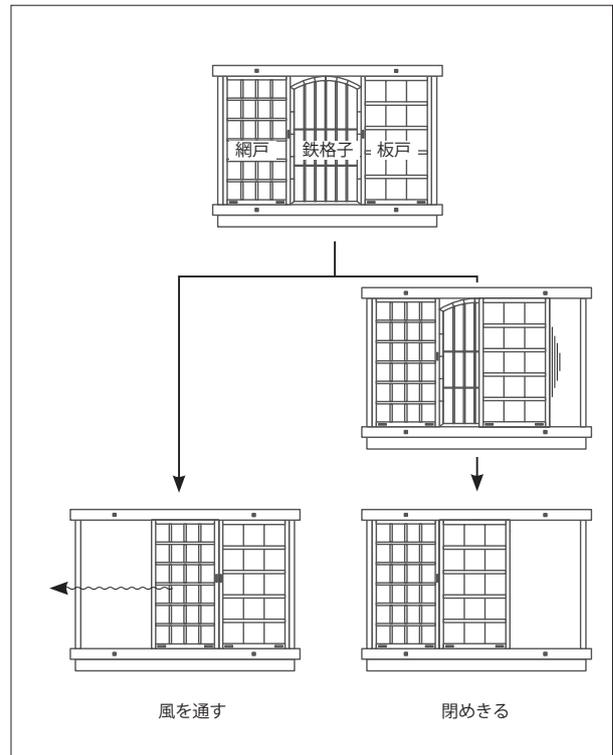


図 3-46. 調整可能な建具



図 3-47. すべての開口部に同じ機構の建具が取り付け

第6節 現状建物についての 参考意見

本庄煉瓦倉庫の活用に関し、専門家を招き参考意見を伺った。お招きしたのは、木村勉先生（長岡造形大学教授）。長年、文化財建造物の保存修復に携わり、特に煉瓦造建造物に関しては第一人者である木村先生を本倉庫にお招きし、参考意見をいただいた。その際の、質疑応答を参考資料として巻末資料に付した。

実施日	2012年6月6日
聞きとり対象者	木村勉（長岡造形大学）
参加者	中谷礼仁、山田俊亮、本橋仁（議事録）、 春田典靖、百野太陽、福井亜啓、丸茂友里、 浦上卓司（録音）、小林千尋、川崎香織、 佐藤美佳

第7節 評価

旧本庄商業銀行倉庫は、かつて繭取引で栄えた本庄町の様子を今に伝える文化財建造物である。1997年には、「国土の歴史的景観に寄与しているもの」として国の登録有形文化財の指定を受けるなど、これまでも一定の評価を得てきた。また現市民にとっては、レンガ造りの洋菓子店として、ながく親しまれてきた。2011年の洋菓子店閉店に際しては、積極的な活用に向けて本庄市が買取を行うなど、現在では街の貴重な観光資源ともなっている。

本プロジェクトによる各種調査により、既往研究に加え多くの新事実が判明した。その成果により本倉庫は、本庄市という一地域における史的文化的価値のみならず、日本の近代化における貴重な文化遺産として位置づけられると判断した。この判断は、今回判明した設計施工主体と、それに起因する設計方法に依るところが大きい。以下に示す。

まず文献調査により、本倉庫は清水店（現、清水建設株式会社）が明治29(1896)年に設計施工した物件であることが判明した。また、その設計には第3代設計技師長清水釘吉と、後に第4代設計技師長となる岡本鋈太郎の直接的な関与が明らかとなった。要するに、当時の清水組における最も水準の高い設計組織の下で建設された。

次に、煉瓦の組積法の分析により、その綿密な設計方法を明らかにした。この組積

法において特筆すべきは、第4節で取り上げた長手段における小口煉瓦の存在である。これは、開口部周りの強度と美観、双方の要求に対して、合理的な解決法を同建物の関係者が独自に検討したものであり、他では例を見ない画期的な方法であった。これは同倉庫の本来の目的である繭を担保とする銀行倉庫の設計に際して、銀行倉庫としての堅牢性、また湿気に弱い繭を保管するための通気性、その2つの機能を備えた上で、同時に、建築物としての意匠的統合性も企図されたものと推察される。本プロジェクトの調査研究により明らかとなった、これらの計画方法によって同建物は、当時清水組が積極的に採用していた東京帝国大学建築学科を卒業した若い技師らによるエンジニアリングの粋が集結されたものと考えられる。

また本庄煉瓦倉庫は、現在においても煉瓦壁がほとんど損傷なく、木造軸組ならびに木造トラス小屋組にいたっては、全くといって良いほど腐朽が見られない。清水店技師らの設計方法、またそれを施工する清水店の技術水準は、この現存する本倉庫そのものにより証明されているといえよう。

要するに、明治29(1896)年という煉瓦造倉庫として比較的初期の建造事例であり、かつ当時の先進的な設計体制のもとに計画され、その結果として現在に至るまで大きな損傷を経なかったことは、今後の煉瓦造建築の文化財的研究に供する画期的な事例として認識されてよい。

再生活用の暁には本建物の本質をよく理解し、いたずらに部材を損傷しない細心の検討とともに、法規的側面からも現状の合理的な倉庫の概要を保護する支援が欠かせな

いものと判断する。今後とも同建物が、地域に根ざし、生きられるよう、各関係の叡智を結集すべきである。



図3-48. 煉瓦倉庫 西側立面